

ふるさと運動から生まれたものづくり・人づくり・町づくり

～都市との交流と住民主体の町づくりを目指して～

福島県 みしまち 三島町



生活工芸館前を会場に、毎年6月に全国から約150名の工人らが出展し、多くの工芸品が展示・販売され賑わう。



町の木である「桐」の木は町内に点在し、毎年5月中旬～下旬にかけて薄紫色の花を咲かせる。三島町は、桐産業の振興に力を注いでいる。



毎年3月には、町内の工人らが製作した工芸品が数多く結集し、生活工芸館を会場に生活工芸品展が開催される。

事例の概要

- 全国に先駆けて昭和49年より都市との交流を目的とした「ふるさと運動」をスタートさせた。
- 暮らしの中から生まれた伝統的なものづくりの技と豊かな自然を現代の生活にも生かしていく生活工芸運動が展開され、高齢者を中心に盛んに取り組まれている。今年で第21回目の開催となった「ふるさと会津工人まつり」には、2日間で約1万人の来場者

が訪れている。

- サイの神、鳥追い、虫送り、ひな流し等の昔ながらの伝統行事を各集落が継承しているほか、サイの神をメインイベントとした「雪と火のまつり」、地域の特産品が堪能できる「会津地鶏まつり」等の各種イベントを実施し、都市との交流に継続して取り組んでいる。

評価のポイント

三島町は、良質な会津桐の産地として知られ、昭和49年より全国に先駆けて都市との交流を目的とした「ふるさと運動」をスタートさせ、過疎山村の振興策の流れが生まれた。住民自らが地域づくりに取り組み、それに賛同する首都圏の特別町民と理想のふるさとづくりを行うもので、この運動は特別町民制度やふるさと小包誕生のきっかけとなった。

こうしたまちづくりの取り組みにより、暮らしの中から生まれた伝統的なものづくりの技と豊かな自然を現代の生活にも生かしていく「生活工芸運動」、伝統行事の数々を集落の誇りとして守って連帯意識の高揚を図っていく「地区プライド運動」等を展開している。

国の伝統的工芸品にも指定されたヒロロやマタタビ、山ブドウ細工などの奥会津編み組細工が高齢者を中心に盛んに取り組まれており、今年で第21回目の開催となった「ふるさと会津工人まつり」には、2

日間で、約1万人が訪れた。さらに、全国各地から約150人の工人（ものづくりをはじめとした創作活動をする人）が思い思いの手作り品を持って三島に集い、出品・展示を行った。さらに、桐の里みしま工人郷として、町全体で約40軒の工人が自宅を工房・ギャラリーとして開放している。

また、地域の特産品である三島産会津地鶏を堪能できる「会津地鶏まつり」（来場者約1,000名）、今年第35回となった「雪と火のまつり」（来場者約1,000名）等、地域特産品や伝統行事を生かしたイベントを実施している。

このように三島町では、先祖から受け継いできた伝統行事や文化、日常生活の中で伝承されてきた取り組みを風化させることなく活動を続けており、今後も安定的な取り組みが期待される。このような点が評価された。

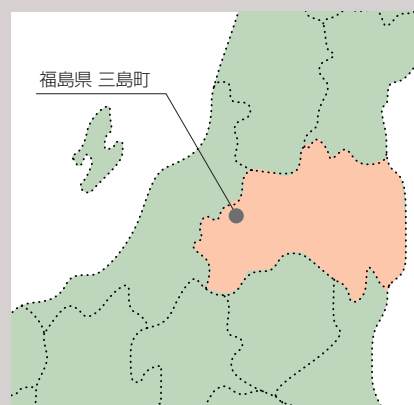


生活工芸館では、ものづくり体験ができるほか、毎年「冬のものづくり教室」が開催され、町内の工人らが集い、技の伝承・工人の育成が行われている。



今年で35回目となった「雪と火のまつり」は、小正月に各地区で行われている「サイの神」や「鳥追い」などの伝統行事を再現したイベントとして開催される。

福島県 三島町(みしまち)



国勢調査人口

(単位：人)

昭和35年	昭和45年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
5,803	4,108	2,883	2,674	2,474	2,250

人口増減率

(単位：%)

H17/S35	H17/S45	H7/H2	H12/H7	H17/H12	高齢者比率	若年者比率
△61.2	△45.2	△7.2	△7.5	△9.1	43.2%	9.2%

交通のご案内

自動車 磐越自動車道会津坂下ICから
国道252号経由で20分
鉄道 JR会津宮下駅下車
飛行機 福島空港から車で100分

団体連絡先

三島町
〒969-7511
福島県大沼郡三島町大字宮下字宮下350
TEL. 0241-48-5511(代表)
<http://www.town.mishima.fukushima.jp>

高根の生活が楽しくなるような「ふるさと元気づくり」

新潟県 朝日村 高根フロンティアクラブ



廃校となった小学校を再生し、食堂IRORIを開店。



天蓋高原交流広場のひまわり畑を背景に、各種イベントを行うひまわりフェスティバル。



収穫祭の様子。山芋掘り、きのこ採りの収穫体験等を通して地域住民間のコミュニケーションを図ると共に、他地域からの参加者との交流を行う。

事例の概要

- 少子高齢化の進行、都市への人口流出、地域産業の停滞等、過疎化が進む中で、このままでは生まれ育った集落がなくなると危機感を持った有志により、「高根フロンティアクラブ」が平成8年に結成された。
- ひまわりフェスティバル(平成10年度から)や収穫祭(平成12年度から)、食と器の文化祭(平成18年度から)等の各種イベントの開催により、年々活動範囲を

- 広げている。また、イベントに地域住民が参加することによって、集落に活力が生まれ、失われつつあった地域コミュニティの再生につながっている。
- 平成15年度に開設された廃校を活用した農家レストランは、地元食材をふんだんに用いた郷土料理を提供しており、土日祝日のみの営業にも関わらず年間3,500人の利用客を集めている。

評価のポイント

少子高齢化の進行、都市への人口流出、地域産業の停滞等、過疎化が進む中で、このままでは生まれ育った集落がなくなると危機感を持った有志により、自らの手で地域の自然を守り、自らで地域を変えていこうと「高根フロンティアクラブ」が結成された。

同クラブは、「元気づくり計画五つの柱」に基づき、高根らしいイベント、天蓋高原の観光農園、森の里づくり、小学校の再生、新しい特産品づくりの各計画に基づき、高根の豊かな資源を活かしながら、地域に密着したかたちで活動している。特にイベントについては、平成10年度からひまわりフェスティバル、12年度から収穫祭、さらに昨年度からは食と器の文化祭等、年々その数を増やし、活動の輪を広げている。

平成15年には会員の手作りにより、地域の象徴

であった小学校(廃校)を再生利用した農家レストランを開店。メニューは、コシヒカリ、そば、イワナ、山菜など自分たちの集落で調達できる食材にこだわって作る郷土料理となっている。レストランは、土日祝日のみの営業にもかかわらず、年間3,500人の利用客があり、地域の顔となっている。また、構造改革特区の認定を受け、農家レストランではどぶろくの製造を行っている。さらに地元酒造会社との連携による地元農産物との雪中貯蔵など様々な取り組みを実施し、地域活性化に貢献している。

中山間地域における典型的な若者・中堅層有志による地域づくり組織である同クラブは、コミュニティ・レストランの運営、体験交流、商品開発等により、雇用のみならず、地元住民の生きがいや地域の活力を創造しており、その活動パフォーマンスは著しく高い。このような点が評価の対象となった。

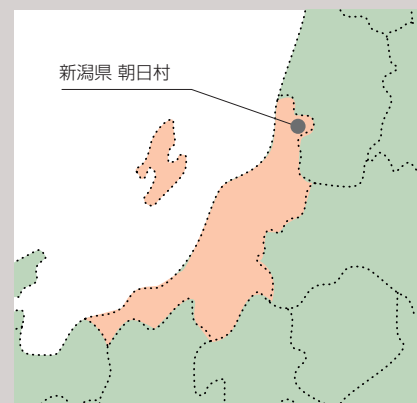


どぶろくの特産品の認定を受け、平成17年からどぶろくの醸造を開始。



茶碗や箸、敷物など食に関わる手仕事のものづくりをテーマとして、山のおいしさ学校や食と器の文化祭を開催。

新潟県 朝日村(あさひむら)



国勢調査人口

昭和35年	昭和45年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
17,702	14,829	13,014	12,837	12,125	11,489

人口増減率

H17/S35	H17/S45	H7/H2	H12/H7	H17/H12	高齢者比率	若年者比率
△35.1	△22.5	△1.4	△5.5	△5.2	31.5%	13.2%

交通のご案内

- 自動車 日本海沿岸東北自動車道中条ICから国道7号経由60分
- 鉄道 JR羽越線村上駅からバス50分(高根行)
- 飛行機 新潟空港から車で90分

団体連絡先

- 高根フロンティアクラブ
- 〒958-0211
- 新潟県岩船郡朝日村大字高根480
- TEL.0254-73-0298(事務局)

世界遺産ウォーク能動体験のすすめ

～歩くことから得られる普遍的価値～

とつかわむら とつかわ こどう
奈良県 十津川村 十津川鼓動の会



おみねおくがけ
なびきツアー大峯奥駈ウォーク。行仙の山小屋前にて参加者と撮影。



なびきツアーの最終日には総勢約60人で、道普請を行った。



こへち はてなし
なびきツアー小辺路ウォーク。果無集落での説明の様子。

事例の概要

- 古道案内を通じて地域に古くから伝わる文化・歴史・精神風土等を守り伝えることを主な活動目的に、村民を中心に「十津川鼓動の会」を結成。会設立以来、古道案内件数、参加者数ともに大幅に増加している。
- 昨年度は、官民一体となって企画立案した「なびきツアー」を実施。夜に山道を歩く闇の体験や電気も水もない山小屋での宿泊など、非日常的な体験で達成感

- を味わえる内容となっている。また、先祖から1,300年受け継いできた「道」を次の世代に引き継ぐための「道普請」と呼ばれる道の整備を地元の人と協働作業で行う。
- 千年以上の歴史をもつ修験道において、厳しい修行を現代風にアレンジし、心と体を使って自身のゴールを目指すという能動体験を盛り込んだ内容となっている。

評価のポイント

奈良県十津川村は、総面積672平方キロメートルの日本最大の村であり、うち645平方キロメートル、実に96%を林野が占める村である。

「十津川鼓動の会」は、世界遺産である熊野古道を中心とした古道案内を通じて、地域に古くから伝わる文化・歴史・精神風土等を守り伝えることを主な活動目的に、将来の産業化を視野に入れ活動している村民を中心とした24名からなる有償ボランティアの語り部団体である。平成13年10月に村からの呼びかけで語り部の育成がスタートし、14年から本格的にガイドの活動を行っている。会の活動としては、来訪者への語り部活動として「果無(小辺路)ウォーク」と「玉置山(大峯奥駈)ウォーク」を定期的にホームページで参加者を募集して実施している。

また昨年度からは官民一体となって企画立案した「なびきツアー」を実施。夜に山道を歩く闇の体験や電気も水もない山小屋での宿泊など、非日常的な体験で達成感を味わえる内容となっている。また、最終日には先祖から1,300年受け継がれてきた「道」を次の世代に引き継ぐための「道普請」といわれる道の整備を地元住民と協働作業で行う。厳しい修行を現代風にアレンジし、心と体を使って自身のゴールを目指すという能動体験を盛り込んだ内容となっている。

本事例は、都市から遠く広大で険しい過疎地域にあって、地域への誇りと祖先への畏敬の念を持ちながら、着実に活動の範囲を広げ、実績を伸ばしている取組として評価された。

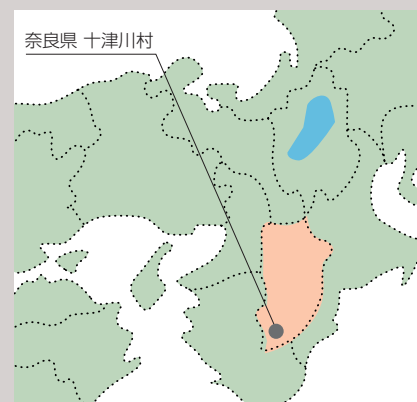


こへち はてなし
なびきツアー小辺路ウォーク。参加者は世界遺産の果無集落手前の石畳を、語り部を先頭に歩く。



玉置神社境内。日本最古と言われる社務所等は、国の重要文化財に指定されている。

奈良県 十津川村(とつかわむら)



国勢調査人口

昭和35年	昭和45年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
15,588	8,502	5,516	5,202	4,854	4,390

人口増減率

H17/S35	H17/S45	H7/H2	H12/H7	H17/H12
△71.8	△48.4	△5.7	△6.7	△9.6

高齢者・若年者比率(17年)

高齢者比率	37.9%
若年者比率	11.1%

交通のご案内

自動車 大阪方面から、南阪奈道路 葛城IC～五條市～国道168号を南へ約100分
新宮方面から、国道168号を北へ約80分
鉄 道 近鉄八木駅から奈良交通バスで、約3時間30分
JR五條駅から奈良交通バスで、約2時間30分
JR新宮駅から奈良交通バスで、約2時間
飛行機 白浜空港から国道311号經由本宮から国道168号を北へ約110分

団体連絡先

十津川鼓動の会
〒637-1217
奈良県吉野郡十津川村大字風屋
TEL. 0746-67-0166
十津川鼓動の会専用電話
090-8937-6920
<http://www5.kcn.ne.jp/~saka1951/index.html>

廃校舎が「森の巣箱」に生まれかわる

～床鍋地区の住民による集落再生への挑戦～

高知県 津野町 森の巣箱運営委員会



旧床鍋小学校は、小さな巣に全国から飛来してくる小鳥たちを迎えることができるようにしようと「森の巣箱」と名付けられた。



昭和58年に廃校となった木造校舎を改築し、集落住民の思い出をそのまま閉じこめ、学校の懐かしい面影を至るところに残している。



20数年間、集落に店がない状態が続いていたが、森の巣箱に店(コンビニ)が出来たことで、日常生活が非常に便利になり、長年の住民の願いがかなった。

事例の概要

- 住民のアイデアを結集させ、地域のコミュニティ活動の拠点となる「居酒屋」や「集落生協」のほか、地域外の人々との交流を促進するための「宿泊施設」の機能を有する「森の巣箱」を完成させ、交流の拠点となっている。
- 森の巣箱の運営については、行政の手を借りず地区全員が参加する「運営委員会」を組織するなど、住

- 民自らの手ですべてを行っている。
- 平成16年からは、自然あふれる地域を知ってもらい、地域の環境を保全しようと「ホタルまつり」を住民からの発案で実施しており、今では来場者が1,500人を超え、津野町を代表するイベントに成長している。

評価のポイント

「森の巣箱」は、町が県の補助を受けて改修した廃校(旧床鍋小学校)を活用した農村交流施設である。木造2階建ての建物の1階には、日用雑貨や食料品販売コーナー、地域コミュニティ活動の拠点となる居酒屋がある。2階は、約25人が宿泊可能な宿泊スペースとなっており、地域外の人々との交流拠点としても活用できる。

「森の巣箱」という奇抜なネーミングや、オープン直後に旅行雑誌等で取り上げられたこと、都会の喧噪から離れ山によって隔絶された「隠れ里」のような趣のある施設は、都会人のハートを掴み、毎年の利用客は目標を上回り、年々増加している。また、

利用客は、県内小学生のスポーツ合宿やゼミ合宿から企業合宿や結婚式まで、幅広い。

このような取組を土台として、平成16年からは、自然あふれる地域を知ってもらい、地域の環境を保全しようと、「ホタルまつり」を住民自らの発案で実施した。今では、来場者が1,500人を超え、津野町を代表するイベントに成長している。

廃校を利用して活用する例は多々あるが、365日24時間空間が利用され、地域住民の日常生活を支えるコンビニや地域の憩いの場・交流の場としての居酒屋等、地元のライフラインとしても機能する複合拠点に生まれ変わった点が評価された。

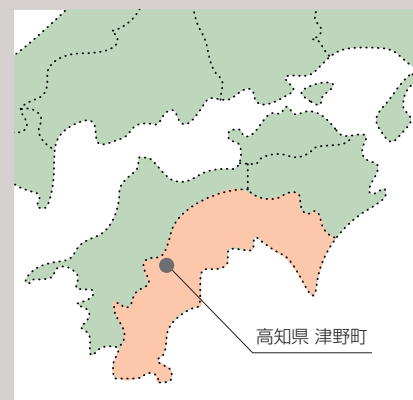


朝はコーヒーを楽しみ、昼はうどんやカレー、夜は仕事を終えた住民の憩いの場として居酒屋に変身。時には町外からの宿泊者との交流で盛り上がる。



県外から森の巣箱を訪れた男女が、自然に囲まれ温かみのある森の巣箱を気に入り結婚披露宴を行うなど、今までに集落を挙げて2組の男女の門出を祝った。

高知県 津野町(つのちょう)



国勢調査人口

昭和35年	昭和45年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
13,249	9,626	8,000	7,554	7,258	6,862

人口増減率

H17/S35	H17/S45	H7/H2	H12/H7	H17/H12
△48.2	△28.7	△5.6	△3.9	△5.5

高齢者・若年者比率(17年)

高齢者比率	35.9%
若年者比率	12.2%

交通のご案内

自動車 高知自動車道須崎東ICから国道56号、197号経由約30分
 鉄道 JR土讃線須崎駅から車で約35分
 飛行機 高知龍馬空港から、バス約30分+JR約40分+車約35分(空港から車で約100分)

団体連絡先

農村交流施設 森の巣箱
 〒785-0210
 高知県高岡郡津野町貝ノ川床鍋392番地2
<http://www.vill.hayama.kochi.jp/subako2.htm>

「柚子の里づくり」で新産業を創出

大分県 日田市 株式会社つえエーピー



福岡都市圏の交流物産展での販売の様子。



ゆずこしょう加工体験と併せた工場見学会を開催。



ゆず商品は、大好評。特にモンドセレクション特別金賞を受賞したゆずはちみつは、世界的にも評価が高い。

事例の概要

- 株式会社つえエーピーは平成4年に、主として旧中津江村、旧上津江村、旧前津江村の3村と地域JAの出資による農産物加工所として設立され、地域の特産品である柚子、林間わさび、こんにゃく等の加工・販売に取り組んでいる。近年では地域を訪れる人々を対象に、ゆずこしょうやこんにゃくの加工体験プログラムも提供している。
- 近年では、地元産の柚子を使った製品が主力商品となり、「ゆずはちみつ」が平成16年～19年の4年連続で、世界食品コンクール「モンド・セレクション」で特別金賞を受賞するなど、ブランド化が進んでいる。
- 商品のPRについては、自社の商品のみならず、地域の自然や人などを含め、地域全体をPRするよう工夫されている。

評価のポイント

株式会社つえエーピーは平成4年に、主として旧中津江村、旧上津江村、旧前津江村の3村と地域JAの出資による農産物加工所として設立され、地域の特産品である林間わさび、こんにゃく等の加工・販売に取り組んできた。

原料の特性を活かし、安全・安心な商品を消費者に提供するため、大学・県などの研究機関と連携し、高品質な商品の開発に取り組んでいる。また、従業員に調理師資格を取得させ安定した品質の商品を生産するとともに、自社での商品開発を可能にするなど、社内の能力開発にも積極的に取り組んでいる。

近年では、地元産の柚子を使った製品が主力商品となり、中でも「ゆずはちみつ」が2004年～2007年の4年連続で、世界食品コンクール「モンド・セレクション」で特別金賞を受賞するなど、ブランド

化も進んでいる。

平成17年度からは、旧日田市内の梨農家140戸が抱える規格外品の加工にも取り組んでおり、つえエーピーの次の主力商品として育つことが期待されている。

また、独自の販路を開拓し、全国の食品業者・料理店・小売業者等、200社を超える取引先を持ち、製品の需要量は年々拡大している。過疎地域にあって、従業員25名を抱える貴重な雇用の場に育つとともに、原材料を安定した価格で買い付けることにより、農家所得の向上にも大きな役割を果たし、地域の農林業の発展に貢献している。

このように本事例は、地域の特産品を活かした地場産業の創出と地元雇用の受け皿として役割を果たし、地域づくりに貢献しているものとして評価された。

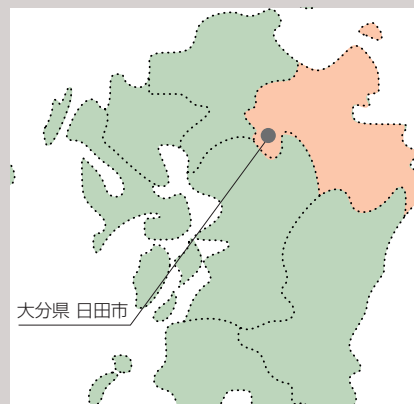


ゆずこしょうづくり体験の様子。



ゆずの加工の様子。

大分県 日田市(ひたし)



国勢調査人口

(単位：人)

昭和35年	昭和45年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
98,651	87,102	81,580	79,776	77,369	74,165

人口増減率

(単位：%) 高齢者・若年者比率(17年)

H17/S35	H17/S45	H7/H2	H12/H7	H17/H12	高齢者比率	若年者比率
△24.8	△14.9	△2.2	△3.0	△4.1	26.5%	14.2%

交通のご案内

自動車 大分自動車道日田ICから国道212・442号経由60分

鉄道 JR久大本線日田駅から自動車60分

飛行機 福岡空港から自動車120分(九州自動車道・大分自動車道経由)
大分空港から自動車140分(大分空港道路・大分自動車道経由)

団体連絡先

株式会社つえエーピー
〒877-0301
大分県日田市中津江村柝野2791-1
TEL. 0973-54-3210
FAX. 0973-54-3366
<http://www.tennensouko.com>

食の安全から発進した都市漁村交流の推進

～小さな町のキラリと光る挑戦～

北海道 標津町



生産者による標津町ハサップの取り組みを一般消費者に説明する町民観光ガイド。



秋サケの鮮度保持対策による管理温度を検証するため秋サケ腹部の内部温度を計測して記録する生産者。



北海道の郷土料理である「サケのチャンチャン焼き」を炭火で味わってもらい、食への理解を深めてもらう。

事例の概要

- 北海道産いくら0-157食中毒事件による風評被害を契機に、平成12年、町内の漁業者、加工業者、運送業者などの水産業に関わる1,300人(町民の21%)が一体となり、高度衛生管理システム(ハサップ方式※)を日本一の産地の責任として国内に先駆けて作り上げた。
(※ハサップ=HACCP Hazard Analysis Critical Control Point)
- 漁獲から加工・運送にいたるチェック項目を定め、万が一にも食品事故を起こさないとする標津町ハサップによる

徹底した食品管理は、消費者と向き合った「信頼と本物のブランド」を確立した。

- 平成12年に漁獲から加工までを体験する地域ハサップ体験ツアーを開催したことを皮切りに、サケ網起こし体験やサーモンフィッシング等、漁業体験活動を中心とした48もの体験プログラムを実施し、交流人口の増加、観光消費の拡大が図られるなどの成果をあげている。

評価のポイント

平成10年、北海道産イクラの「0-157食中毒事件」による風評被害を契機に、道と連携してハサップ導入の推進に着手した。消費者への信頼・責任を明確化し、翌々年の平成12年、町内の水産業界を挙げて高度衛生管理システム(HACCP方式)を創り上げ、国内に先駆けて「標津町ハサップ」の実践をスタートさせた。

「標津町ハサップ」は、漁船・市場・加工業・流通業における徹底した衛生管理と鮮度保持管理により、町外からも評価が高まり、HACCPマークにより「信頼と本物のブランド」を確立した。

また、ハサップ手法を取り入れた生産活動を販売

業者や末端消費者に知らせることが産地の責任であり、ブランド化につながる、との考え方から、平成12年に漁獲から加工までを体験する地域ハサップ体験ツアーを開催した。この取り組みを土台にして、漁協を軸として、観光協会、商工会からなる町をあげた協働の組織を設立。サケ網起こし体験やサーモンフィッシング等の漁業体験活動を中心とした48もの体験プログラムを実施している。

このように本事例は、食の安全を地域のブランドにまで発展させたほか、豊かな水産資源を活用した体験ツアーを実施し、都市部住民との交流を図る取り組みとして評価された。

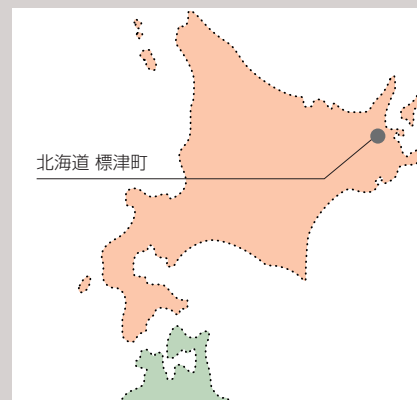


修学旅行生によるイクラ作り体験。



修学旅行生によるジャガイモ掘り体験。

北海道 標津町(しべつちょう)



国勢調査人口

昭和35年	昭和45年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
7,727	8,001	7,310	7,087	6,298	6,063

人口増減率

H17/S35	H17/S45	H7/H2	H12/H7	H17/H12
△21.5	△24.2	△3.1	△11.1	△3.7

高齢者・若年者比率(17年)

高齢者比率	21.5%
若年者比率	15.6%

交通のご案内

鉄道 JR釧路駅からバス150分

飛行機 根室中標津空港からバス30分

団体連絡先

標津町
〒086-1632
北海道標津郡標津町北2条西1丁目1番3号
TEL. 0153-82-2131
FAX. 0153-82-3011
<http://www.shibetsutown.jp/>

不便で元気な武良づくり

おきしまちょうむら
島根県 隠岐の島町 武良づくり企画実行委員会



武良自治会では、特に子供の安全・安心のために「子供見守り隊」を結成した。



ゲンキ市には中村地域の人口以上に人が集まり、賑わいをみせる。



古民家「幸」では、民家宿泊の他に陶芸やリフォーム体験による交流を行っている。

事例の概要

- 中村地区は自立した地域を目指した「武良づくり企画」を作成し、それに基づき、「不便で元気な武良づくり」を合言葉に武良づくり企画実行委員会を設立した。
- 郷土食材を中心とした製造・販売など地場産品の販売加工拠点となっている「さざえ村」、若者を中心としてさまざまなイベントを企画立案している「ポレポレ文化村」が中心となり、独自の地域づくりを企画・実践している。
- 他にも防犯・防災対策に率先して取り組む「武良自治会」、古民家を活用した体験民泊の受け入れを実施している「古民家「幸」」、惣菜・みそ・ぼん菓子などの加工販売を行っている「おふくろの里」等がある。

評価のポイント

「武良」とは、隠岐島後の北東部に連なる伊後・西村・湊・中村・元屋地区の総称である。武良づくり企画実行委員会は、過疎・高齢化が進む武良地区において、町村・漁村の合併により地域の活力が失われないよう、地元の活動団体が連携組織をつくり、住民自らの創意工夫により行政に依存しない独自の地域づくりを実践している。

武良づくり企画実行委員会は、中核となる「さざえ村」と「ポレポレ文化村」が常に協力体制をとりながら、村おこし・まちづくりの企画を次々と打ち出し、地域主役の元気活動を行ってきた。「さざえ村」は郷土食材を中心とした製造・販売など地場産品の販売加工拠点となっており、1ターン者2名が精力的に活動している。また、「ポレポレ文化村」は、年3回物産

を集めた地元海産物や加工品を売り出す「ゲンキ市」を開催しているほか、国道沿いの空き缶拾いの実施や武良の見所マップも作成している。

この他にも、古民家を活用した体験民泊や修学旅行生を受入を実施している「古民家「幸」」、防災対策を積極的にすすめ、災害の種類によって避難場所を記載したハザードマップの作成や、約50人で結成される武良見守り隊による子供の安全に努めている「武良自治会」、高齢者の女性を中心としたグループで、惣菜・みそ・仕出し餅・ぼん菓子などの加工販売を行っている「おふくろの里」が、主な活動団体としてあげられる。

本事例は、自分たちの手で独自に多様な地域づくりを展開して取り組んでいる点で評価された。



さざえ村の加工場は子どもたちの体験場所となっている。



さざえ村の食堂は交流の場として定着している。

島根県 隠岐の島町(おきのしまちょう)

国勢調査人口

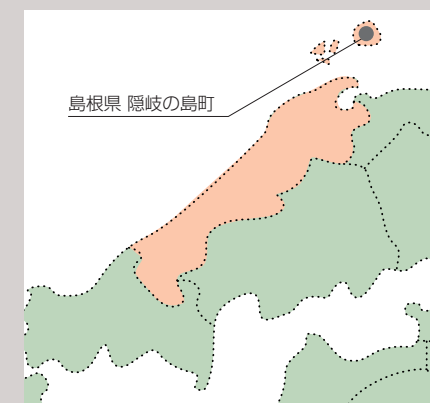
(単位：人)

昭和35年	昭和45年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
26,846	20,533	19,090	18,367	18,045	16,904

人口増減率

(単位：%)

H17/S35	H17/S45	H7/H2	H12/H7	H17/H12	高齢者比率	若年者比率
△37.0	△17.7	△3.8	△1.8	△6.3	31.2%	13.0%



交通のご案内

船舶 隠岐汽船
七瀬港～西郷港
〔フェリー〕約2時間20分
〔高速船〕約1時間10分
西郷港からバス40分

飛行機 隠岐空港からバス50分

団体連絡先

武良づくり企画実行委員会
〒685-0434
島根県隠岐郡隠岐の島町中村
TEL. 08512-4-0021

悠久のときの流れに包まれた英彦山 ひこさん

～歴史と自然と人とのふれあいを目指して～

福岡県 そえだまち 添田町観光ガイドボランティア



山形県の羽黒山、奈良県の大峰山と並び、日本三大修験道のひとつとして数えられる英彦山の全景。



英彦山花園から見た英彦山スロープカーと花駅。



「ひこさん山伏の里探訪」にて現地案内。参加者全員が山伏の装束を身にまとい、英彦山路を山伏問答などを聞きながら散策する。

事例の概要

- 英彦山神宮参道沿いに残る史跡や自然、動植物などを紹介するガイドボランティアとしての活動を行うとともに、参道筋の清掃や福岡県指定有形民俗文化財「財蔵坊」（添田町歴史民俗資料館）の環境整備を始め、新たな観光資源の発掘のための山中研修などの活動も行っている
- 平成17年度には、町が設置したスロープカーの中間駅（花駅）に小学校の廃校を利用した観光案内所が設けられたことから、観光客は予約なしでも観光ガイドを受け

られるようになり、より多くの観光客に英彦山の魅力を伝えられるようになった。

- 平成13年から都市との交流による観光促進のため、「ひこさん山伏の里探訪」を年1回開催している。参加者全員が山伏の装束である白い法被、頭巾を身にまとい、修験道にまつわる山伏問答を聞きながら英彦山路を散策する取り組みで、毎回40名から70名が参加している。

評価のポイント

添田町観光ガイドボランティアは、山形県の羽黒山、奈良県の大峰山と並び日本三大修験道である英彦山（標高1,200m）に町外から数多く訪れる観光客のニーズに応えるため、主に英彦山神宮参道沿いに残る史跡や自然、動植物などを紹介している。当該団体は、観光ガイドボランティアとしての活動を行うとともに、参道筋の清掃や福岡県指定有形民俗文化財「財蔵坊」（添田町歴史民俗資料館）の環境整備を始め、新たな観光資源の発掘のための山中研修など、添田町の観光PRの先駆者としての活動も行っている。

平成17年度には、町が設置したスロープカーの中間駅（花駅）に、小学校の廃校を利用した観光案内所が設けられたことから、観光客は予約無しでも観光ガイドを受けられるようになり、より多くの観光

客に英彦山の魅力を伝えられることとなった。

このほか、平成13年からは都市との交流による観光促進のため、「ひこさん山伏の里探訪」を年1回開催しており、参加者全員が山伏の装束である白い法被、頭巾を身にまとい、観光ボランティアによる修験道にまつわる話や山伏問答を聞きながら、英彦山路を散策する取り組みも行っている。

これらの活動に加え、近隣市町村の小中学校や子ども会などの自然体験学習でのガイドや地元中学校での講演などを行い、子どもたちに英彦山の素晴らしさ、魅力を伝える取り組みを行っている。

このように本事例は、修験道の拠点として著名な英彦山の中でのガイドを行うとともに、自然を大切にし、後世に地域の歴史・文化を語り伝える取り組みを行っている。このような点が評価された。

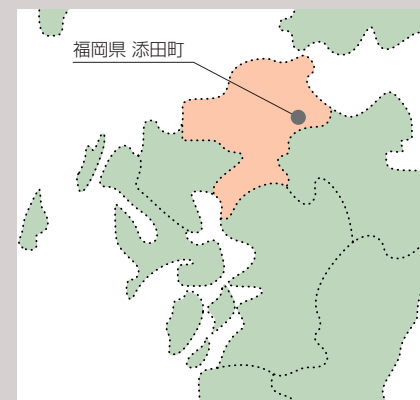


冬には雪山をガイドすることもある。



友好交流都市である韓国江華郡の中学生への登山ガイドの様子。

福岡県 添田町 (そえだまち)



国勢調査人口

(単位：人)

昭和35年	昭和45年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
25,170	16,810	14,632	13,763	12,750	11,810

人口増減率

(単位：%) 高齢者・若年者比率(17年)

H17/S35	H17/S45	H7/H2	H12/H7	H17/H12	高齢者比率	若年者比率
△53.1	△29.7	△5.9	△7.4	△7.4	32.3%	11.6%

交通のご案内

- 自動車 九州自動車道 小倉南ICから40分
- 鉄道 JR日田彦山線 添田駅から徒歩5分
- 飛行機 福岡空港から自動車で80分

団体連絡先

添田町観光ガイドボランティア
〒824-0691
福岡県田川郡添田町大字添田
2151番地(添田町役場 商工観光係)
TEL. 0947-82-1236
<http://www.town.soeda.fukuoka.jp/>